

ブルートレイン 1,500 kmの旅とワニ肉ステーキ

南十字星の下、アフリカ大陸の最南端ケープタウン目指して走る「ブルートレイン 1,500 km」の旅は、いま思い出しても、その当時初物の興味と興奮で躍動した感動が鮮やかに甦ってくる。鉄鋼関係のミッションにお供して、初めてこの国際的な列車に乗ったのは、悪名高い人種差別政策「アパルトヘイト」がまだ厳然と残っていた時代で、ことの是非は別にして、当時の治安は今日ほど悪くはなかった。ヨハネスブルク駅を朝9時に発った列車は、翌日正午に終着駅ケープタウンに到着した。

徹底的に人種差別を実行した開通当初のスタイルを踏襲して、11両の全乗客84人に対して、40人ほどの黒人クルーがかしづくようにお世話する、悪く言えば貧富と身分の格差を露骨に思い知らせる、鼻につく嫌味なマナーを見せ付けてくれた。徹底した教育を受けた黒人たちは、豪華なコンパートメント客室42室、食堂車、サロンカー等の賓客の要望に対して、いつもにこやかで献身的なサービスを提供してくれる。

かつて奴隷を逃亡させないために国境周辺に獰猛な野獣を放したと言われる、南アフリカのサファリ地区を走る車窓からは、ところどころに野生の動物たちが見られるという。私たちは、そんな作り話のような話を乗車前に聞かされ、またその2日前の豪華なディナーに、なんと本物の「ワニ」のステーキを提供され、身体がぞくぞくする戦慄を覚えた。ワニと聞かされ、当初あまりいい感じはしなかった。だが、少々堅いが味は普通のステーキとさほど変わらなかった。

私たちは、月光の下のハンティングでも、南ア特有の「ナイトサファリ」の醍醐味を味わった。明るい月に導かれながら獲物を狙う「ひょう」の後を追いかけたり、野獣に無防備なランドクルーザー上でライフル銃を持ったガードマンに護衛され、1mの至近距離を保ちながら、百獣の王ライオンを先導するように人獣一体となって彼らの獲物も追った。スリル満点の環境の中で、ほっと寛ぐ野営食も「トムソン・ガゼル」の鉄板焼きだった。

真夜中にキンバリー駅で2時間ばかり停車している合間に、駅前の広場へ出てみた。星空の下で何人かの集団が身を寄せ合ってベンチで寝ていた。車や人の気配が全く感じられず、気味の悪いほどの静寂さが漂っていた。これが、往時白人社会を潤わせ、南アフリカ経済を支え、活気溢れる金鉱山の町だったのかと感慨深い思いにとらわれた。

夜が明けると列車は、だだっ広い穏やかな平原を徐々に走り下った。延々と

続くぶどう畑の中をひたすら走る。車窓から外を見ていると、近年脚光を浴びている南ア産ワインの輸出国であることをまざまざと実感させられた。終着地ケープタウンでは、さすがに野生動物メニューはなかったが、締めくくりに旅の思い出をさらにヒートアップさせる、強烈なインパクトを与えてくれた。なんと土地の人々が世界最高の夜景として自慢する、ケープタウンの夜景が私たちの目前に忽然と現れたのだ。背後には私たちを取り巻くように並ぶ衝立の岩肌、そしてその岩肌に照射されたライトアップの光と、前方に広がるテーブルマウンテンの黒い闇とのコントラストは、まさに夜景の真髄と呼んでもいいものだった。神秘的な夜景はそれまでに見た世界一の夜景と称えられる、リオ、シドニー、ナポリ、サンフランシスコ、香港などの夜景の静画的な印象を完全に粉砕するものだった。